

外国語活動における

「コミュニケーション能力の素地」を養うための授業づくりに関する実践研究

～個への関わりと場の設定の工夫を通して～

川井田大輔(長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻)

楠山 研(長崎大学大学院教育学研究科)

立岡 昌文(長崎大学大学院教育学研究科)

本実践研究では、「コミュニケーション能力の素地」の一つとして「方略的能力」「情意的素地」を挙げ、その2つを重視するポイントとして「素材・話題そのものへの興味・関心」「異文化・自国の文化への気付き」「発見相手に伝えたい情報・思い」「相手から得たい情報・思い」を挙げた。その4つのポイントをもとに授業実践を行った。質問紙調査・振り返りシート・授業のビデオの分析を行った結果、児童が自分から相手にコミュニケーションを取ろうとする様子や外国の文化に興味・関心を持つ様子が見られた。しかし、相手の言っていることをなんとかして理解しようとする様子や、外国の人と話したいという興味・関心をもっている様子は見られなかったことが課題として残った。

キーワード：小学校外国語活動 コミュニケーション能力の素地 個への関わり 場の設定

はじめに

21世紀に入り、現代社会はグローバル化が進み、コンピューターが様々な分野で導入されるなど、社会が変化してきた。それとともに、私たちの生活も大きく変化し、メールなど電子機器を使った情報のやり取りが可能になったことで、人と言葉を交わさず、便利に素早くやり取りをすることができるようになった。しかし、一方では、人と人が直接ふれ合うコミュニケーションの機会が減少し、現代社会の人間関係の希薄化のひとつの要因となっているとの指摘もある。さらに、このような生活の変化が、現代の児童の人間関係やコミュニケーションのあり方に大きく影響してきていると考える。

小学校における外国語教育については、様々な議論が行われてきた。平成20年に、外国語活動が領域として、小学校5・6年生において必修化された。それにあたり、中央教育審議会は、平成20年1月に出した資料において、小学校段階の外国語活動について、次のように述べている。

総合的な学習の時間に、国際理解教育の一環として、英語の授業が行われていたが、答申にもあるように取組にばらつきがあるため、それを是正するため、外国語活動という領域を設定したのである。では、小学校外国語活動では、何を目標に行っていくのであろうか。

小学校外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」(小学校学習指導要領第4章外国語活動第1目標)である。目標の中にある「コミュニケーション能力の素地」が、小学校の外国語活動において重要となる言葉である。しかし、「コミュニケーション能力の素地」と書いてあっても、私が初めて見たときに、何のことなのかわからなかった。調べてみてもはっきりとした定義がない。そのため、外国語活動の授業を行う担任の先生は、児童に何を養わせるのか曖昧なまま、ゲームやチャンツを取り入れた授業を行っているという現状もあるのかもしれないと考えた。次の表は、ベネッセコーポレーションが教員に対して行った意識調査の一部である。

| 質問項目 | 学級担任 2010年 | 担当学年別 | | 年齢別 | | | | |
|---|---------------|-------|------|------|------|------|-------|------|
| | | 5年生 | 6年生 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代以上 | |
| 1)あなたは、学習指導要領の外国語(英語)活動の目標や内容を知っていますか。 | 1.よく知っている | 14.9 | 15.2 | 14.2 | 8.4 | 14.0 | 17.9 | 16.0 |
| | 2.まあ知っている | 65.3 | 64.8 | 64.8 | 65.9 | 63.9 | 66.4 | 65.0 |
| | 3.あまり知らない | 18.3 | 18.8 | 19.1 | 23.8 | 20.0 | 14.7 | 17.6 |
| | 4.まったく知らない | 1.5 | 1.2 | 1.8 | 1.9 | 2.0 | 0.9 | 1.4 |
| | 解答不明 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 |
| 2)あなたは、学習指導要領の外国語(英語)活動の目標や内容を理解していますか。 | 1.よく知っている | 9.4 | 9.9 | 8.9 | 6.5 | 8.5 | 12.1 | 8.1 |
| | 2.まあ知っている | 66.3 | 65.6 | 65.7 | 61.4 | 65.4 | 69.4 | 65.8 |
| | 3.あまり知らない | 22.8 | 23.2 | 23.8 | 29.5 | 25.0 | 17.6 | 24.4 |
| | 4.まったく知らない | 1.3 | 1.2 | 1.5 | 2.7 | 1.1 | 0.8 | 1.4 |
| | 解答不明 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.3 |
| 3)あなたは、外国語(英語)活動を指導することに自信がありますか。 | 1.よく知っている | 1.6 | 2.3 | 1.2 | 0.5 | 2.5 | 1.5 | 1.4 |
| | 2.まあ知っている | 30.1 | 29.7 | 30.5 | 29.5 | 28.5 | 33.8 | 24.9 |
| | 3.あまり知らない | 56.1 | 54.5 | 57.3 | 56.8 | 58.0 | 53.9 | 57.7 |
| | 4.まったく知らない | 12.0 | 13.4 | 10.8 | 13.0 | 11.0 | 10.6 | 16.0 |
| | 解答不明 | 0.2 | 0.2 | 0.1 | 0.3 | 0.0 | 0.2 | 0.0 |

【第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査) 巻末基礎資料集】

(1)(2)の質問に対する答えは、「知っている」「まあ理解している」の回答が一番多いものの、「あまり知らない」「あまり理解していない」と教員が回答しているのが約20%から約30%いることがわかる。また、自信に関しては、「あまり自信がない」と教員が回答しているのが約57%であることがわかる。なぜ、指導することに自信がないのか。それは、外国語活動で何をねらいとして、児童にどのような力を身に付けさせるのかを、教員自身がしっかりと理解していないからだと考える。

そこで、本実践研究では、「コミュニケーション能力の素地」がどのようなことなのかを、コミュニケーション能力の定義を踏まえ明らかにした上で、その「コミュニケーション能力の素地」を高める授業を考案する。その授業を実践し、事前・事後のアンケートの変容と、振り返りシート、授業中の児童の様子(ビデオ映像)を総合的に評価し、授業を行うことで本当に「コミュニケーション能力の素地」を養うことができたかどうかを検証する。その後、その結果から得られた成果と、課題を述べ、まとめとして、今回「コミュニケーション能力の素地」を養うための授業づくりの提案を行う。

1. コミュニケーション能力の素地について

文部科学省は「コミュニケーション能力の素地」について次のように述べている。

小学校学習指導要領における「コミュニケーション能力の素地」とは、小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものです。これらは、中・高等学校の外国語科で養うこととしているコミュニケーション能力を支えるものとなります。

小学校の外国語活動は、単に国際理解を図ることを目的とした活動ではなく、中学校の外国語科の学習に接続するものとして位置づけられています。そのため、中学校においては、地域の小学校における外国語活動の指導の内容について、扱われている単語や表現などについてもきめ細かく把握することが、特に中学校第1学年の指導内容に係る指導計画を作成する際には必要となります。小学校においても、中学校と連携を密に図っていくことに配慮してください。

【文部科学省ホームページ Q&A 答 11-1】

外国語活動の目標の3つの柱「理解・態度・慣れ親しみ」のことを、「コミュニケーション能力の素地」と説明している。しかし、これを実際に担任の先生が指導する際には、具体化し、「言語や文化に対する体験的な理解」とはどういうことをすることなのかなどを考えなければならない。複雑化し、様々な定義がある「コミュニケーション能力の素地」をわかりやすくする必要があると考える。そこで、素地として必要になることを2つ挙げ、これについて述べていくことにする。

(1) 素地を支える資質・能力

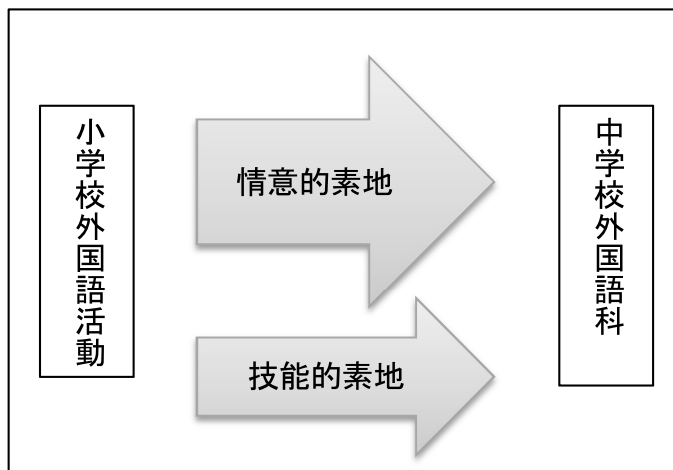
○ 方略的能力

Savignon(1983)のコミュニケーション能力モデルを踏まえて考えると、「社会言語学的能力」「方略的能力」の2つが「コミュニケーション能力の素地」と考えられる。「社会言語学的能力」は、会話の流れ・文脈に合った正しい英語を使うことができる能力であると考え。また、「方略的能力」は、正しい英語を使えなくても、知っている英単語や、ジェスチャーを使って、なんとかして相手に伝えようとする能力であると考え。私は、今回、小学校外国語活動では、状況に応じて適切に英語を使う能力よりも、間違えながらも、ジェスチャーを使いながら何とかして相手に伝えようとするのが大切だと考えた。文部科学省が述べている3つの柱のうちの「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」に「方略的能力」が当てはまり、素地として適切だと考えたため、この方略的能力に着目し、それを高めていくことを大事にしていくことにした。

○ 情意的素地

萬谷(2011)は「コミュニケーション能力の素地」を情意的素地と技能的素地があると述べている。情意的素地は、「なんとかわかり、伝えようとする態度」「間違いを恐れない態度」「言葉や文化の違いや共通性への興味」であり、これらは、外国語教育の最初の段階で身に

付けることは、大きな意義があると述べている。



技能的素地は、「聞く力」「音イメージ」「語彙の増強」であり、一定程度の期待をすることができると述べている。この2つの素地のうち、文部科学省が述べている3つの柱を踏まえると「情意的素地」が小学校外国語活動で養うべき素地として適切だと考える。また、この情意的素地は方略的能力を支えるものであると考える。

(2)2つを重視した授業づくりのポイント

では、「コミュニケーション能力の素地」の中でも、私が大事であると考えられる能力・態度である「方略的能力」「情意的素地」を重視した授業づくりのポイントを4つ考えた。

- ① 素材・話題そのものへの興味・関心
- ② 異文化・自国の文化への気付き・発見
- ③ 相手に伝えたい情報・思い ←自己表現
- ④ 相手から得たい情報・思い ←他者理解

①から④について、それぞれ説明を行う。

①素材・話題そのものへの興味・関心

外国語活動の授業を進めていくに際し、まず、児童が授業の内容に入るにあたり、素材・話題への興味・関心をもたなければ、

授業が進まない。そこで、外国語活動では、授業の始めに、チャンツ(リズムに合わせて英語を話す練習)やゲームを通して英語を練習したり、日本にはない外国特有の文化に気づかせることで、児童が興味・関心を抱くような工夫を行っている。しかし、そのゲームが楽しいだけの学びのないものになっている場合もあり、活動一つ一つにねらいをもたせて、行うことが大切である。

②異文化・自国の文化への気付き・発見

外国語活動では、英語を原則として取り扱うことになっているが、英語圏の国のみならず、世界の様々な国の文化や習慣について触れる機会が多くある。外国の文化は、日本では当たり前だと思っていることと同じかもしれないし、全く違うかもしれない。外国の文化を知るだけでも児童は興味をもって聞くだらう。また、異文化に触れることで、違いを認める多様性を児童に大切にする機会にもなる。さらに外国の文化について聞くと、自分の国の文化と自然と比較しようとする。それを通して、自分の国の文化を省みる機会になる。何気なく考えていたものも、じっくりと考えることによって新たな発見を見出すことができる。外国語活動では、このように異文化・自国の文化への気付きを大切にする必要がある。

③相手に伝えたい情報・思い ←自己表現

④相手から得たい情報・思い ←他者理解

コミュニケーションを行う中で、自己表現・他者理解はとても大切なことである。人間関係が希薄化している中、自分の意思を伝えきれない児童も少なからずいる。自分の意思を伝えることはとても大切である。自己表現を行うことで、伝えることが楽しいと思うと同時に、自分について改めて考えることで、自己肯定感が高まる。そして他の人はどうなのかなど知りたいと思うようになり、他者理解にもつながる。他者理解は、相手の気持ちを考え、思いを寄せることである。この自己表現と他者理解を繰り返し行っていくことにより、人間関係が構築されていく。この自己表現・他者理解を行うのがコミュニケーション活動である。英語を使っているような友達とコミュニケーション活動を行うことによって、その楽しさに触れたり、コミュニケーションの大切さに気付くようにする。英語の意味がわからなくても、なんとかして相手に伝えようとしたり、なんとかして相手が何を言っているのかを、顔の表情やジェスチャーから理解しようとする姿を大切にしたい。

2. 内容

本研究では、「コミュニケーション能力の素地」を養うための手立てとして、「場の設定」と「個への関わり」という二つの面に注目をすることで、工夫を行い、授業づくりを行っていく。それぞれについて、詳しく述べる。

(1)場の設定

授業全体において、この「場の設定」を行うことはとても大切である。教師が児童にコミュニケーションをとらせるのではなく、児童が自らコミュニケーションをとりたい！と思うような場を教師が設定することが重要である。

特に、私が大切にしたいと考えているのは「発見のある伝えたい内容にする」ことである。前章で述べたように、新たに発見することがあったり、「伝えたい！」という思いを大切にすることで、自己表現・他者理解につながるからである。普段、学校生活を共にしている友達だからこそ、新しい一面を知った時には驚きがあると共に、相手を理解しようとする。その何とかして相手に伝えよう！相手が言っていることを何とかして理解しようとする姿が見られるような場の設定を行いたい。

(2)個への関わり

個への関わりは、他教科ではよく言われていることで、児童一人一人の実態に合わせて行っていくことが大切であると言われている。個への関わりが大切であると考えたのは、実習で行かせていただいているクラスの中に、外国語活動の時の様子を見てみると、恥ずかしさを覚えてあまりコミュニケーションをとることができていない児童や、障害を持っている児童、英語を話す自信がない児童が見られる。児童全員が、「コミュニケーション能力の素地」を高めるためにできることは何なのかと考えたところ、先ほど述べた場の指導に加え、それぞれの児童に対して行う個への関わりを行うことを工夫点とした。

外国語活動において個への関わりを行う場合、どのような場面でどのように行うのか。主に個への関わりを行うのは、授業の最後のコミュニケーション活動の場面とした。実際に話をしている場面は、最後のコミュニケーション活動である。コミュニケーション活動を行う際に、それぞれの児童に指導をすることが大切である。具体的にどのような形で個への関わりを行ったのかは、授業の要旨とともに、詳しく述べていくこととする。今回は私のみでの授業を行ったが、ALTの先生がいる場合、二人で児童のコミュニケーション活動を見ることができると、児童の実態を二人で共有しておくことで、より細かく、個への関わりを行うことができると考える。

3. 授業実践

(1)研究の方法

本研究では、長崎県内のB小学校で授業実践を行った。研究対象は、第6学年の児童25名である。授業の実施日は平成27年12月8日(火)である。検証方法は、事前・事後に行う児童対象の外国語活動についてのアンケート調査である。また、授業の中で取り扱ったワークシート・振り返りシート、授業のビデオ記録を用いて、授業前後で「コミュニケーション能力の素地」を養うことができたかを検証する。ここでは、アンケート調査について詳しく説明しておく。

今回のアンケート調査は、松宮(2014)が作成した尺度24項目の中から15項目を抽出して行った。それぞれの因子にCronbachの α 係数を算出したところ、コミュニケーション因子が0.87、異文化英語志向因子が0.70、自己有能因子が0.77、理解明確化因子が0.78、インターアクション形成因子が0.84という結果が得られた。また、松宮によれば、妥当性・信頼性ともに十分に検証されており、適切な質問紙であると言える。

(2)授業の具体

1. 単元名: Hi, friends! 2 Lesson6 What time do you get up? 「一日の生活を紹介しよう」

2. 本時の目標(4/5)

What time do you ~ ? という表現に慣れ親しみ、積極的に友達の一日の生活の時刻について尋ねたり、答えようとしている。

3. 授業の概要

○導入

本時の授業の導入として、前回まで学習した内容の復習として「What time do you ~?」の表現の練習のため、チャンツを用いて練習を行った。このチャンツでの練習は、この単元に入って初めてのものであった。次に、最後のコミュニケーション活動の際に、ジェスチャーが重要になってくるため、ジェスチャーを含めた、様々な行動の表現の練習を行った。単語の表現を黒板にイラストとともに貼っておき、リズムに乗せてテンポよく行った。

○展開

本時の展開では、まず、「私はだれでしょうクイズ」を行った。これは、英語で授業者の1日の生活を英語で紹介し、その生活がだれのことなのかを当てるようにした。この紹介をする際には、ジェスチャーを取り入れながら、英語がわからなくても、そのジェスチャーを見

て理解できるようにした。その後、「自分の1日の生活をなんとかして相手に伝えよう」というめあてを立てた。めあてを提示した後、自分の日曜日の1日を友達に紹介することを伝え、紹介する際には日本語を使わずに、知っている英単語やジェスチャーを使ってなんとかして相手に伝えることを大切にするよう指示した。そのため、まず紹介する1日を考えさせた。その後、その1日をどのように紹介することを考えさせた。そして、それを隣のペアの友達と練習をし合い、本当に伝わるのかを考える。そこで教師が授業の導入で行ったデモンストレーションを振り返らせ、どのように行っていたかを参考にするようにした。改めて、伝え方を考えた結果、前後の班でメンバーを入れ替え、お互いの日曜日の1日の紹介を行った。

伝え方が上手な児童がいたので、その児童の紹介を全体に向けて行わせ、児童が自分の紹介を行う際の参考となるようにした。

○まとめ

本時のまとめとして、振り返りシートに本時の振り返りを書かせた。振り返りとしてはコミュニケーション活動の際に重要としている3つのポイント「smile」「clear voice」「eye contact」を3段階で自己評価する。また、自由記述の欄を設けており、本時で感じたことや学んだことを書くようにした。全員書いた後、代表の児童に本時の振り返りを発表させ全体で共有した。

(3)結果と考察

4段階評定尺度法(4.よくあてはまる, 3.どちらかといえばあてはまる, 2.どちらかといえばあてはまらない, 1.あてはまらない)を採用した。本分析における検定は、「対応のある2群の母平均の差の検定」である。事前・事後調査とも、欠席者がいた為、n=23で行っている。

ア、コミュニケーション志向因子

(*p<.05 **p<.01)

| 平均値 | | t 値 |
|-------|-------|-------|
| 授業前 | 授業後 | |
| 12.52 | 13.26 | 2.68* |

イ、異文化英語志向因子

| 平均値 | | t 値 |
|------|------|--------|
| 授業前 | 授業後 | |
| 5.48 | 6.31 | 3.22** |

ウ、理解明確化因子

| 平均値 | | t 値 |
|------|------|------|
| 授業前 | 授業後 | |
| 8.61 | 8.83 | 0.89 |

エ、インターアクション形成因子

| 平均値 | | t 値 |
|-------|-------|------|
| 授業前 | 授業後 | |
| 12.52 | 13.09 | 1.55 |

オ、自己有能因子

| 平均値 | | t 値 |
|-------|-------|----------|
| 授業前 | 授業後 | |
| 5.261 | 6.522 | 3.3325** |

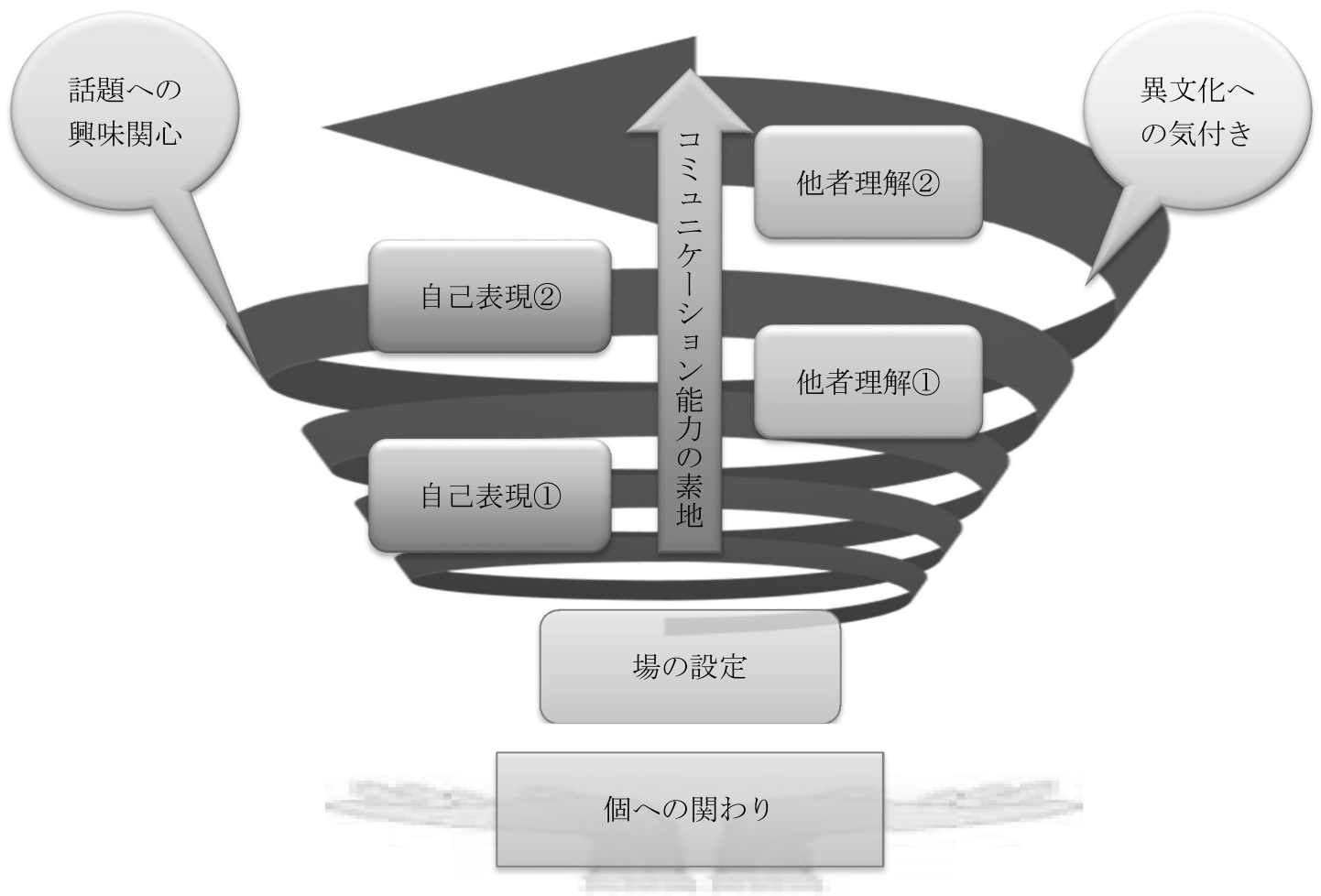
授業を行ったことにより、5つの因子のうち、3つの因子において有意差が見られたことや、授業中の様子、振り返りシートの記述から見て、より活発にねらいに沿ったコミュニケーション活動を行うことができていたと考える。その成果の一番の要因として挙げられるのは、「場の設定の工夫」である。コミュニケーション活動を行う際に、より児童に身近な状況を生み出す必要があった。なぜなら、児童がイメージしやすい状況を作り出すことで、よりコミュニケーション活動を行う意欲を高めることができるからである。そこで、コミュニケーション活動を行う場の設定として、自分の日曜日の1日の過ごし方について相手に伝えることを設定した。平日は、毎日学校で友達と会うため、1日の生活はほぼ同じである。学校が休みである休日を話題とすることで、一人一人の休日の過ごし方は違う。また、単に伝えるだけでは私が目的としている「なんとかして相手に伝えようとする姿」「相手の言っていることをなんとかして聞いて理解しようとする姿」を引き出すことはできない。そこで、紹介する際には、できるだけ日本語を使わずに、知っている英語、ジェスチャーを使って相手に伝えることとした。そうすることによって、必然的に相手の言っていることをなんとか理解しようとすると同時に、なんとかして伝えようとする。

次に挙げられる有意差が見られた要因として、個への関わりである。児童の中には、英語が得意な児童がいれば、苦手な児童もいる。児童全員が先ほど述べたような姿にするために工夫することが大切である。具体的には、表現の練習形態を学級全体から、児童半分と児童半分、ペアで練習するというように大きいものから小さいものへと段階的に行った。そうすることにより、苦手な児童でも負担を感じずに取り組むことができた。また、1日の生活の表現を考える際には、自分で考えることを基本としたが、どうしても思い付かない児童は、授業の最初で練習した表現も使って良いことにした。そうすることにより、思い付かなくてコミュニケーション活動に入れないということがほぼなくなった。また、コミュニケーション活動中の支援として、その児童に寄り添い、一緒にジェスチャーを使って伝えようとするなど支援を行った。そうすることで、ジェスチャーなど思い付かないことがあってもコミュニケーション活動を行うことができる。苦手な児童もなんとかして相手に伝えようとしている姿が見られた。

課題として挙げられるのは、先にチャンツを練習して表現の練習という順番で行ったこと

である。チャンツを練習していた段階で、「get up」などの表現がしっかりと発音できていなかった。そこでも、それらの表現を先に練習しておけば、表現の発音に慣れ、チャンツの練習にもスムーズに入ることができたと考える。また、どのくらい表現に慣れ親しんでいるのかについても事前により正確に把握しておく必要があった。加えて言うならば、児童が言えていない表現であれば、その状況を見極めて柔軟な対応を行い、順番を変えるなどを行う必要もあったのかもしれないと考えている。また、最後のコミュニケーション活動を行う際に、全体で自由に動き回っているような友達と紹介し合うというメインの活動を行うことができなかった。その要因として、チャンツの練習に時間をかけすぎたことがある。そのため、コミュニケーション活動の終わりが、なんとかして伝えようとしている姿がよかった児童を紹介して終わってしまった。振り返りシートのコメントでも、「うまく表現してすごかった。」などにとどまってしまった。「他の友達の1日を改めて知ることができてよかった。」などの新しい面を知ることができたというねらいに沿った感想を得られなかったのはそこに原因があると思われる。最後の活動に時間をかけるように調整を行う必要があったと考えている。

4. まとめ



本実践研究では、「コミュニケーション能力の素地」を養うための授業づくりを行い、検証を行った。具体的には、「コミュニケーション能力の素地」として「方略的能力」「情意的素地」を挙げ、それを養うために「場の設定」と「個への関わり」の工夫を行った。この2つの観点から工夫を行い、授業づくりを行うには、大切なポイントが4つ見出された。それは、「素材・話題への興味・関心」「異文化・自国の文化への気付き・発見」「自己表現」「他者理解」である。それらを含めた授業を実施した結果、5つの因子のうち、3つの因子において有意差が得られた。ここから、「コミュニケーション能力の素地」を養うために効果的な指導であったと言えよう。また、授業中の児童の様子や、振り返りシートの記述を見ても、普段に比べて、より一層なんとかして相手に伝えようとしている姿が見られた。また、「友達の日曜日の生活について新たに知ることができてよかった。」「自分よりも友達の方がゆっくり起きていた。」などと、自分と友達との生活を比べている場面も見られた。このように、児童が、自ら「話したい!」「聞きたい!」と思うような場の設定、児童全員がそのような状態になるように特に苦手な児童への指導を工夫する、その2点をより大切にすることが必要である。

先ほどの図は、本研究の結論をまとめたものである。「コミュニケーション能力の素地」を養うためには、児童が何とかして相手に伝えようとするような場の設定を行う必要がある。その根底には、個への関わりがあり、それぞれの児童に適した指導を行うことが大切になる。そのコミュニケーションの場面において、自分のことを相手に伝える自己表現、相手の言っていることを理解する他者理解を繰り返し行っていくことも欠かせない。そのようなコミュニケーションは、話題への興味・関心や、異文化・自国の文化への気付きが出発点となって始まったり、コミュニケーション活動の中で高まったり、深まったりする。これを繰り返すことで、「コミュニケーション能力の素地」を養うことにつながると考える。

5. おわりに

今回、本実践研究を通して、「コミュニケーション能力の素地」の一つである「方略的能力」と「情意的素地」を養うこととした。そのために、この2つを重視した授業づくりのポイントとして「素材・話題そのものへの興味・関心」「異文化・自国の文化への気付き・発見」「相手に伝えたい情報・思い(自己表現)」「相手から得たい情報・思い(他者理解)」の4つを挙げた。その4つを踏まえた授業を「個への関わり」と「場の設定」の2つの観点から作り、実践した。その結果として5つの因子のうち、3つの因子に有意差が得られた。つまり、積極的にコミュニケーションを行う態度・異文化に対する興味・関心、自分のことを相手に伝えようとする姿勢を一定程度児童に身に付けさせることができた。しかし、なんとかして相手の言っていることを理解しようとする態度、外国人と話してみたいという興味関心を高めることには課題が残った。また、今回は、単元の中の1時間に限る成果である。本来であれば、単元全てを通しての変化を見るのがより効果的であるので、今後実践していきたい。

6. 引用・参考文献

萬谷・直山・卯城・石塚・中村香・中村典編著(2011)「小中連携 Q&A と連携-小学校外国語

活動と中学校英語をつなぐ 40 のヒント-」 p. 20 開隆堂

Savignon, S.J. 1983. *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice*.
Reading, MA: Addison-Wesley□

松宮(2014)「小学校外国語活動の教育効果と課題に関する研究-日本型早期英語教育の学習モデルの構築と検証-」